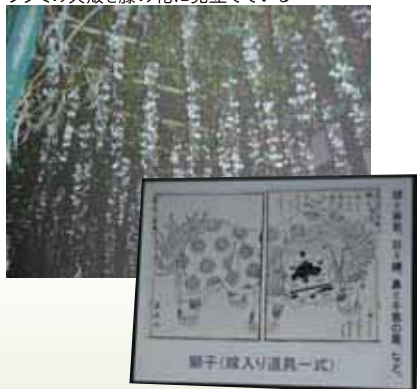


つくる、化粧道具だけで鶏をつくるといった具合です。私は天神祭のボランティアガイドさんたちと現代の造り物として、天満宮に〈しじみの藤棚〉をつくりました。シジミの貝殻を藤に見立てる。また乾物でつくった猩々(しょうじょう)人形は、麩や高野豆腐を着物の模様に、昆布を袴に見立てました。実はこの造り物文化が大阪から波及し今も西日本各地に残っています。市民参加のイベントになったり、作品が常設展示されたりと現役です。それが大阪では絶滅状態です。伝統を守るのも大切ですが、その復活も考えていきたいというのが私の提案です。

天満宮につくられた造り物。
シジミの貝殻を藤の花に見立てている



婚礼筆筒などをモチーフにした獅子舞絵。
江戸時代の大阪の造り物文化が伺える。

守り革新し、文化力を発展

木津川 それではディスカッションに入りたいと思います。

廓 文楽の研修制度という革新を先ほどお話しましたが、文楽は歌舞伎と比べて新作が登場しにくいんです。それでも昨年、シェイクスピアのテンペストを翻案して上演しました。成果は賛否両論でしたが、かなり若い層も見に来て話題にもなりました。

中村 高島先生のご意見の通り、歌舞伎も革新してきたからこそ生き残ってきました。伝統的と思われがちな『曾根崎心中』という狂言は昭和28年の初演です。中村鴈治郎家も明治時代からの家で決して古くから続く家ではありません。時代の要求に応じて変化することに常に考慮していますが、どこまで変えるのか、その境目が難しいと思います。

村田 変化のなかでコミュニケーションやストーリーづくりも考えなければ、受け取る側も意味がよくわからないのではないのでしょうか。光を使ってきれいなものを創っても1年目は話題になりますが100年は続

かない。神戸ルミナリエが支持されるのはやはり「鎮魂」という大きなテーマがあるからです。それからだれがこれをしかけていくかの点では、もちろん市民ひとり一人、NPOも大切ですが、やはり政治にも必要な役割があると申し上げたいですね。

高島 村田さんがおっしゃる通り、私が提案した造り物は、見に来た人とつくった人の間にコミュニケーションが生まれるということなんです。今のイベントは提供する、見に行くというスタイル。その間をつなぐ人間、しかけが必要です。江戸時代には口上師という人がいて、祭があると間に立って説明していた。そういう文化を復活したいのです。

阪口 生前、司馬先生に私が「先生、文化ってなんですか」とお聞きしたことがあります。そしたら先生は「そやなあ、大和屋に来て今日はよかったなあと思って帰ることや」と。それはしつらえだけ、サービスや料理だけがよかってただめで、全部が揃ってなかったらそう思えないと教えてもらいました。それを一生懸命守ってきましたけれど、そういう文化をわかってもらえる方々が増え、またそんな余裕、時間をこしらえてもらえるように、私たちが努力しないといかんと思っています。

八木 余裕という意味で言いますと、神社などでは休日に神事の日をあわせるように極力努力をしています。反面、文部科学省の方針では、大学では所定の授業時間数確保のため休日返上で講義をしなければならぬのが現状です。国が定めた休日を国民が守れない、これは大きな矛盾です。もう一点、現在、日本の大学では日本史を習わなくても卒業できます。そんななかで神事などと言っても、言う側が突出していると見えるでしょう。そういう現状もご理解いただきたいと思います。

中村 欧米ではお芝居が夜の7、8時に始まり10、11時で終わるのが一般的です。

日本の歌舞伎は昼の部は11時から、夜の部は4時から。これでは会社勤めの方は平日はまず行きません。今の興行形態自体が観客動員にそぐわない。歌舞伎が取り組まなければならない大きな課題の一つです。

高島 歌舞伎も料亭の大和屋さんにも行きたいけれど、懐事情が続かないのも事実です。同じ大阪大学教授で劇作家、今は内閣官房参与でもある平田オリザ氏がおもしろいことを言っていました。「演劇保険」を実現したいと。私はもう少し範囲を広げて「文化保険」という制度を国がつくってはどうかと思う。つまり医療保険と同じで日頃、保険料を払っていると、大和屋さんや歌舞伎や演劇に行く補助が出る。そしたら私ももっと行きやすくなるのですが(笑)。

中村 ごもっともです。私たちもせめて3等席を映画料金と同じくらいにしてほしいと常々、言っております。

木津川 それではこれまでの発言をふまえ、最後に上田先生をお願いします。

上田 昨年(2019年)の11月、京都の祇園祭が世界遺産に登録されました。祇園祭の山鉾の装飾にはインドやペルシャ、中国などの織物が採用され、その国際性も高く評価されました。日本の祭が日本人のなかだけで伝わっていると錯覚しがちですが、外来の文化につながっているのです。では世界遺産になったから祇園祭は安泰なのか。そうではありません。山や鉾を守る山鉾町が都市の郊外化で人口が減り、維持が難しくなっているのです。そこで山鉾町では新しい人をどんどん受け入れオープンにしている。新しい鉾町も誕生しつつあります。これが革新です。そういう点も参考にしつつ、守り、革新することで上方の文化力の発展につなげていきたいと思っています。

木津川 本日はありがとうございました。



第2分科会